

公明党土浦市議団 行政視察報告書

視察先	長野県小布施町：「まちじゅう図書館」の取り組みについて 長野県：県立長野図書館改革事業の取り組みについて
視察日	H30年7月26日（木）～H30年7月27日（金）
参加者名	福田一夫　吉田千鶴子　平石勝司

視 察 先 長野県小布施町 町立図書館「まちとしょテラソ」および参加店舗
 視 察 日 H30年7月26日(木)
 視察目的 本がまちと人をつなぐ「まちじゅう図書館」の取り組みを学び、本市の「アルカ
 ス土浦」のさらなる活用・地域活性化へ向けた取り組みとして参考にするため
 視察内容 「まちじゅう図書館」の取り組みについて
 説 明 者 小布施町立図書館まちとしょテラソ館長 桂 啓壯 様
 小布施町教育委員会 教育次長 三輪 茂 様
 かねいちくつろぎサロン 館長 内山 英行 様
 小布施町議会議長 関 悦子 様
 小布施町 議会事務局 監査委員事務局長 山崎 博雄 様

長野県小布施町について

小布施町は、長野県北部に位置し、面積19km²、人口約11,000人の長野県で一番小さな町である。町の中心部から半径2kmほどにすべての集落があり、コンパクトにまとまった町である。江戸時代後期には、北信濃の経済・文化の中心として栄え、豪商たちが、葛飾北斎や小林一茶ら多くの文化墨客たちを招き、文化の香り高い雰囲気形づくられた。豪商・高井鴻山は北斎を四度小布施に招き、晩年を北斎は小布施で過ごし、数々の肉筆画・天井絵などを残した。現在、街並修景事業や花のまちづくりなど、さまざまな取り組みで年間約120万人の観光客を呼び寄せ、来訪者でにぎわう町となっている。

小布施町立図書館「まちとしょテラソ」

①経緯

平成18年、職員と町民を交えた「図書館のあり方検討会」が発足し、誰にでも親しまれる新しい図書館を目指しての検討が始まった。その後、先進事例の収集や学習会などを開催し、新しい図書館は「学びの場」「子育ての場」「交流の場」「情報発信の場」を柱とし、「交流と創造を楽しむ、文化の拠点」をコンセプトに建設された。

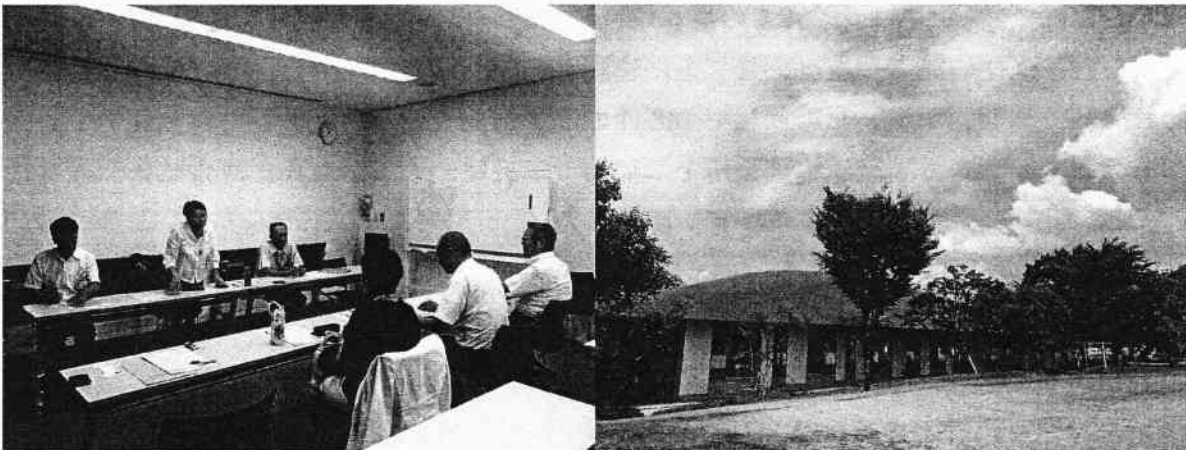
設計者は、公募型プロポーザルとして166件の応募があり、最終5案を町民公開のプロポーザルを行って、ナスカ1級建築事務所・早稲田大学教授の古谷誠章氏に決定した。館長には25人の応募があった。平成21年7月、開館となる。



小布施駅から歩いてすぐの町立図書館「まちとしょテラス」正面玄関前

②特徴

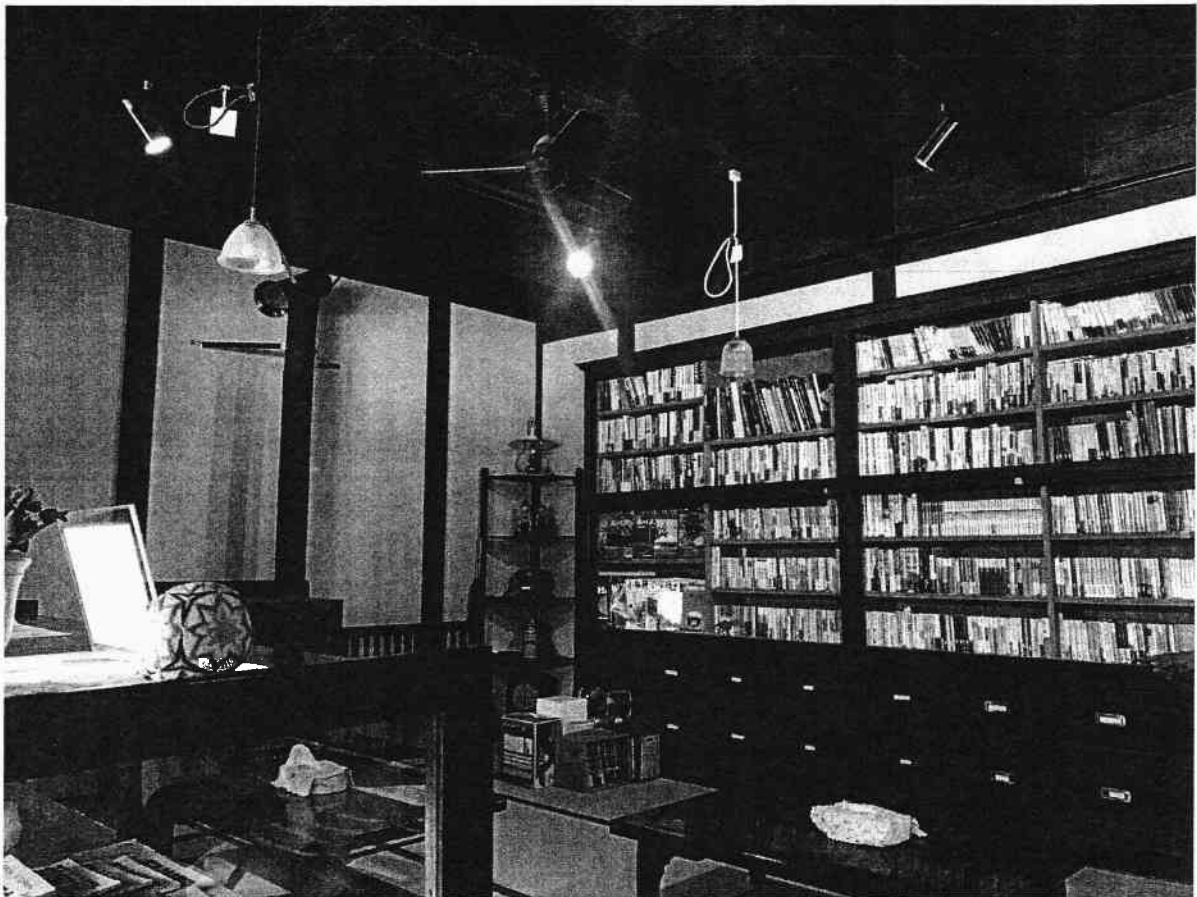
地上1階建て。三角形平面を変形させた、大きな帽子のような局面の屋根のデザインが特徴的な外観。内装は、天井が柔らかなカーブを描き、白い鉄骨は木をモチーフに優しい空間を演出している。窓から自然光が差し込み、仕切りのない広々としたオープンな図書館の印象をうける。「死ぬまでに行ってみたい世界の図書館 15」で6位に選ばれている。説明を受けた会議室では議会報告会も開催をしている。



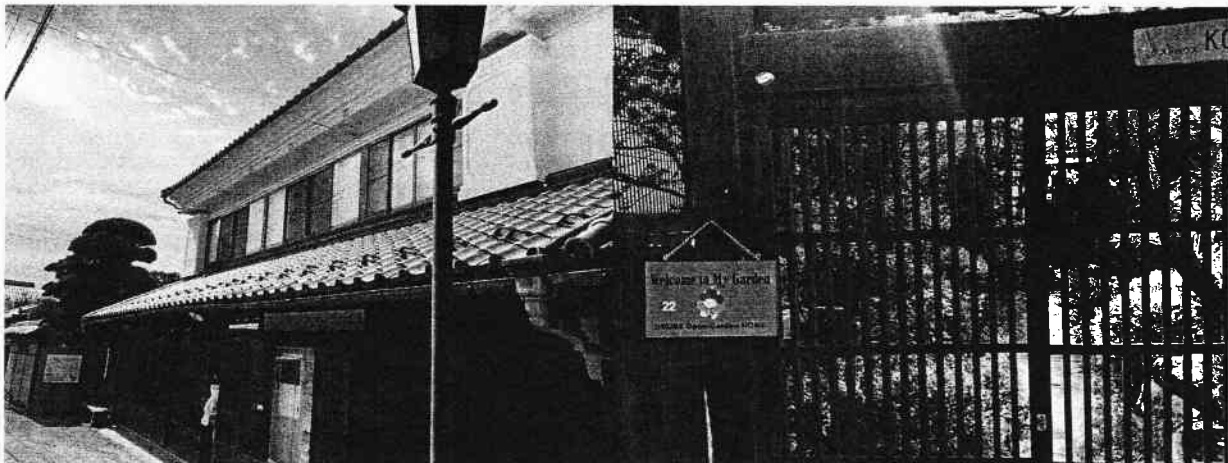
まちじゅう図書館について

2012年に始まった「まちじゅう図書館」は、文字通り、まちのあちこちに小さな図書館を点在させ、街全体を図書館にしておこうという取り組みである。酒屋・味噌屋・銀行・郵便局・カフェなどの一角に、仕事に関係する本やオーナーの趣味の本を並べ、訪れる人と本を通しての交流を図ることを目的とする。

もともとは、「まちとしょテラソ」設計者の古谷氏の発案による。開館時にテラソを中心に街中に小さな図書館をたくさん作り、ICタグをつけて集中管理しようとしたが、予算面から断念した。テラソ開館から2年後、オーナー所蔵の本を並べることから10館でスタートし、現在は17館で展開している。

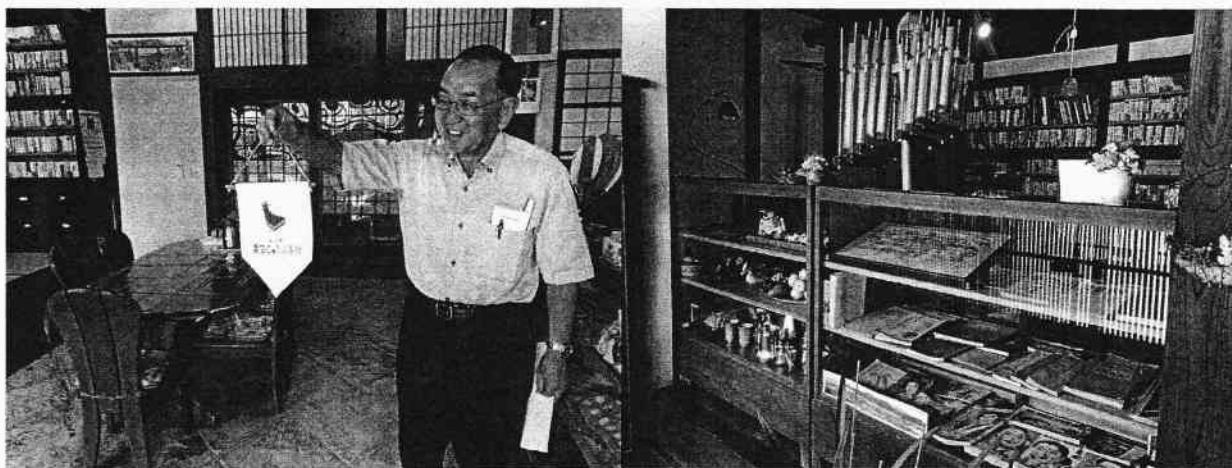


かねいちくつろぎサロン。明治時代に商家だったという個人のお宅を改装したサロン。館長の内山さんご夫婦の小説、マンガなど幅広いジャンルの本が揃っている。文庫本は持ち帰ってもOKにしている。また、夕方5時以降は、予約制で、地域の人々がお酒や食事を持ち寄り、地域の交流の場としての顔をみせるたまり場としての役割もあるとのこと。来訪者数はそのときによってまちまちである。



かねいちくつろぎサロン外観

オープンガーデンの看板



左) 鳥と本を組み合わせたシンボルマーク「オブセドリ」のフラッグ。まちじゅう図書館に参加しているお店や個人宅の目印。オブセドリの旗が出ていないときは休館。



右) 穀平味噌酒造場。

左) 蔵書は味噌の専門書、郷土や食、まちづくり、東洋医学などに関する本が揃う。

主な質疑応答

Q 「まちとしょテラソ」のネーミングについて

A 「まちとしょ」は、もともとは町の図書館の略称である。「テラ」はラテン語で大地。大地を照らそうという意味などがある。ネーミングは公募による。

Q まちじゅう図書館の目標数、個人宅か商店か、町からの補助金について。

A 特に目標は決めずに、ゆるくやっている。手をあげていただける方であれば、個人でもお店でも構わない。町からの補助金はなく、改修費用などの助成もなく、フラッグだけを支給している。

Q まちじゅう図書館のルールについて

A 時間などは自由。フラッグを掲げているときは開館し、閉館しているときはフラッグを掲げていない。本の貸し出しなどについての判断も自由。

Q まちじゅう図書館は、商工会議所との連携はどのようにしたのか

A 特に連携はしていない。手をあげていただいた方にやっていただいている。

Q 「かねいちくつろぎサロン」での来訪者との交流はどのようなものがあるか。

A 勉強しにくる中学生が多い。夕方5時以降は、近所の方がお酒を持ちよって、地域の人の交流スペースとして楽しむこともある。

Q まちじゅう図書館の取り組みが広がることについてはどのように考えるか

A ゆるく、好きなときに始めて、好きなときに終わるような、このような取り組みが広がることは、他でもいいと思う。「オープンガーデン」もルールや縛りもなく、自由に、ゆるいということが大事である。

Q まちじゅう図書館の取り組みが始まった理由について

A もともと小布施には、「お庭ごめん」という「ひとの庭を通っても良い」という文化がある。2000年から始まり、現在130件が参加する「オープンガーデン」という官民一体の取り組みがあったから、まちじゅう図書館という取り組みもやりやすかったというように思う。

視 察 先 長野県立長野図書館

視 察 日 H30年7月27日(金)

視察目的 平賀研也氏が県立長野図書館館長に就任し、図書館改革としてさまざまな取り組みについての先進事例を学び、本市のこれからの図書館のあり方について参考にするため

視察内容 県立長野図書館改革事業の取り組みについて

説 明 者 県立長野図書館 館長 平賀 研也 様
総務課長 羽生 好男 様

県立長野図書館の概要 (H29年4月1日)

所 在 地 : 長野県長野市若里1丁目1番4号

開 所 : 昭和54年8月 ※昭和4年8月設置した場所からの新築移転

敷 地 : 6,744 m² (建物 4,835 m²、駐車場 1,909 m²)

建 物 : RC 地上3階地下1階

職 員 : 34人 (館長1人、総務課3人、企画協力課8人、資料情報課22人)

所蔵資料 : 図書694,272冊 (一般513,647冊、児童91,483冊、郷土89,142冊)

フィルム等 (マイクロ9,929リール、映画2,260本、ビデオ・DVD3,213本)

平成28年度利用状況

開館日数 : 277日 (平日172日、土日祝日105日)

利用者数 : 265,750人 (平日155,595人、土日祝日110,155人)

1日平均利用者数 (平日905人、土日祝日1,049人)

貸出状況 : 図書資料128,656冊 (平日64,195冊、土日祝日64,370冊)

フィルム等8本、VTR教材6本

登録者数 : 82,588人 (新規登録者数2,869人)

平成29年度予算額 211,737千円 (単位:千円)

(図書館管理運営費139,504千円、コンピュータ管理費28,604千円、図書館事業費31,776千円、改革事業費11,853千円)

県立長野図書館長 平賀研也氏

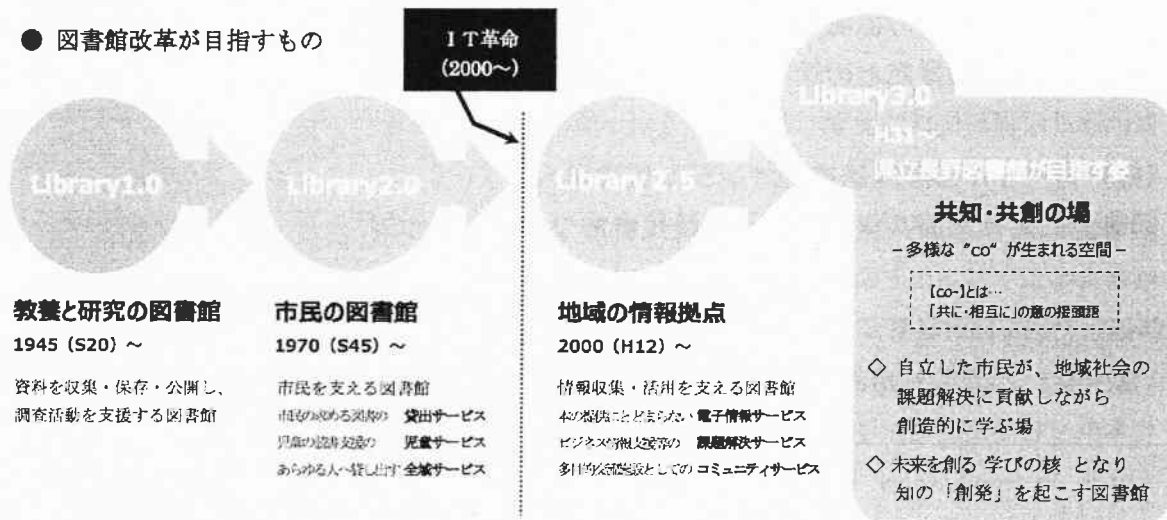
1959年生まれ。1983年から2002年まで、企業に勤務し、法務・経営企画に従事する。2002年長野県伊那市に移住し、公共政策シンクタンクの研究広報誌の編集主幹を経て、2007年4月から2015年3月まで、伊那市立図書館長を務める。2015年4月から県立長野図書館長を務める。

図書館改革について

1. 図書館改革が目指すもの（イメージ図）

【図書館改革のビジョン】

- 図書館改革が目指すもの



- 他の図書館が IT 革命・情報化社会に対応し、「Library2.5 情報の拠点」を目指す中、平賀館長就任前の県立図書館は「Library2.0 市民の図書館」のステージを目指そうという状態で停滞していて、社会の変化に合わせた役割が図られてこなかった。
- H27～H31（平賀プラン）の5年間は、移転50周年となるH41までの約15年間を見据えた図書館像である「Library3.0 共知・共創の場」の実現に向けた基礎作りの期間と位置付けている。

図書館の課題

- ① 図書館の役割変化に応じた設備投資が行われていない
 - ・ IT 革命やデジタル情報のへの未対応
 - ・ 蔵書スペース（書庫）の不足
 - ・ 施設内の未利用空間の増加
- ② 県立図書館の基本機能である資料収集の停滞、「郷土資料」分野の弱体化
 - ・ 図書資料費の大幅な削減
 - ・ 郷土資料保管書庫不足と資料削減による地域資料収集の停滞
- ③ 司書業務が貸出・蔵書管理センターであり、これからの図書館に求められる役割を果たせない
 - ・ 情報の利活用能力（情報リテラシー）向上支援や地域の学びを支援する図書館職員が育っていない。

図書館改革の成果（平賀館長の実績）と今後の方向性

これまでの主な取り組み

●企業・団体・県民との協働・連携

1. 信州大学附属図書館との連携

県内図書館横断検索で大学の蔵書 123 万冊が検索可能になった

2. (株) カーリルの超高速検索エンジン試験導入

3. 図書館における公共空間を考える県民参加ワークショップ

信州大学工学部学生と県民が図書館空間の在り方を検討

建築家や図書館有識者がボランティアで議論に参加

4. 「信州学」との取り組みへの支援

松本県ヶ丘高校の信州学の取り組みをコーディネート

「信州学 for teachers in 高遠」の開催

企画力・情報発信力の大幅な向上

1. 県立ならではの蔵書を活かした大胆な企画展示

発禁 1925-1944：戦時体制下の図書館と知る自由

「GIFT；子どもの世界に変わった時」-進駐軍とともにやってきた児童書と戦前・戦中・戦後-

2. 都道府県立図書館サミット 2016 開催

全国初開催 県立長野図書館と ARG (株) (図書館コンサル) の呼びかけで、全国の長野県立図書館関係者がディスカッション。サミットの成果は ARG の情報誌にまとめられ、全国の図書館へ

3. 市町村図書館支援・連携強化

FB ページ「山に見える図書館-信州のまち・人・図書館」開設。これからの図書館フォーラムの市町村図書館との共催

「情報」の改革

●デジタルベースの導入

H27 1DB 新毎

H28 5DB 朝日・日経・第1法規・国立印刷所

H29 13DB 毎日・読売・日外アソシ・ネットアドバンス・ポプラ社・ジーサーチ・日本統計センター・
農村漁村文化協会

●資料費の回復

H27 26,944 千円 全国水準 44,244 千円を目指し段階的に増額

H28 29,733 千円

H29 34,253 千円 地域資料の収集を強化

「人」の変革

●「信州発・これからの図書館フォーラム」の実施

県民・図書館関係者・地域関係者などが、こらからの公共図書館のあり方を共に考え、実現するための意識啓発・人材育成を実施。

- ・ 信州 知の連携フォーラム (MLA 連携)
- ・ アーバンデータチャレンジ 2016 長野「伊那谷をもっと楽しく知るアイデアソン」
- ・ Wikipedia LTB @信州

「場」の変革

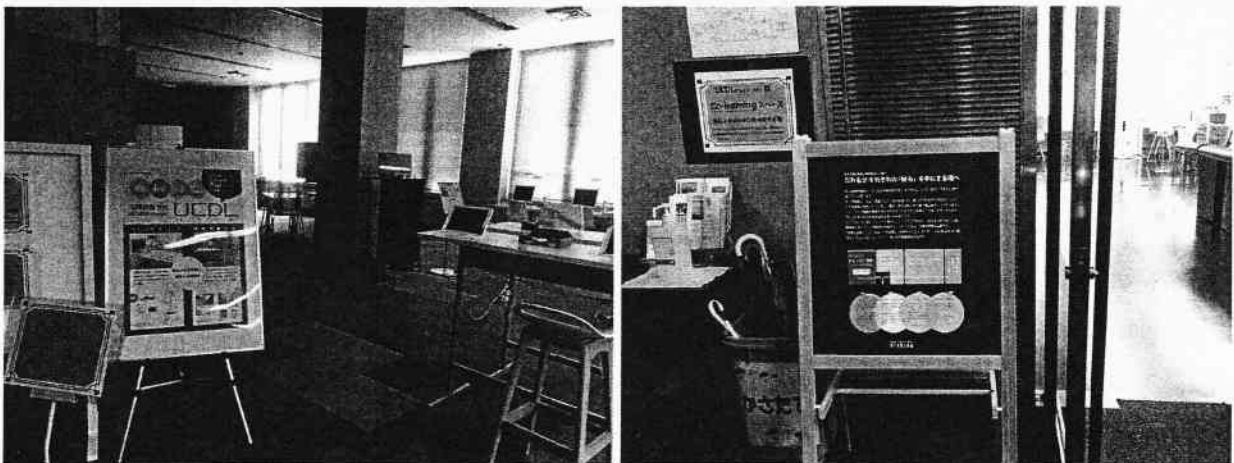
これからの時代に必要とされる「地域の情報拠点」「共知・共創の場」としての公共空間の姿を、館内の利用率の低い空間をリノベーション、整備。

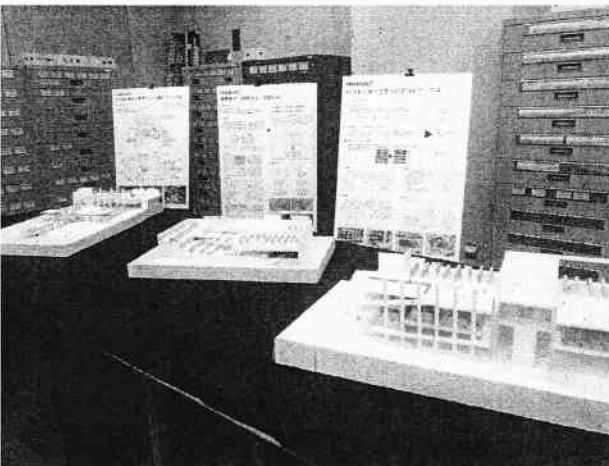
●H28「ハイブリッド図書館/ナレッジ・ラボ」2F

- ・ 新聞雑誌閲覧スペースを、タブレット利用が可能な研修・ワークショップスペースへ改修し、アナログ・デジタルも情報アクセスが可能な空間に

●H29「知識・情報ラボ UC DL (ウチデル)」2F

- ・ (株) 内田洋行とコラボして、ナレッジ・ラボをネーミングライツ制度を活用してリデザイン。
- ・ ICT 機器を備えたアクティブな学び合いと、情報リテラシー向上支援の場を創出





● H30「信州・学び創造ラボ」3F

- ・多様な情報や人が、物理的な条件を超えてつながり合うオープンで自由な公共空間
- ・アイデアを具現化し、新しい社会的価値を生み出す知の創発を促す核となる場を整備

○ 信州情報ゾーン（信州情報検索ディスプレイ）「信州・知の入口」ポータルと連動し信州に関連する情報をテーマごとに検索できるタッチパネル

○ co-Learning ゾーン

グループワークスペース設置や3Dプリンタなど学びの成果をアウトプットできるツールを備える。地域の図書館・公民館・大学などオンラインでつなぎ、市町村と連携して「co-Learning」を全県展開する予定

主な質疑応答

①アーカイブの取り組みについて

Q これから新しい ICT でもっと進むようになるか

A 以前、ICT がなかったときには作って終わりだったが、Wikipedia のように自分で参加して書きかえることができるように、みんながいつでもできる時代になっていくと考える。

Q 戦争体験を語り継ぐことについて

A 硬くなく、ひとひねり加えていく。時間軸と空間の広がりの中に情報が見えることが大事である

②信州・学び創造ラボについて

Q どのような空間になるのか

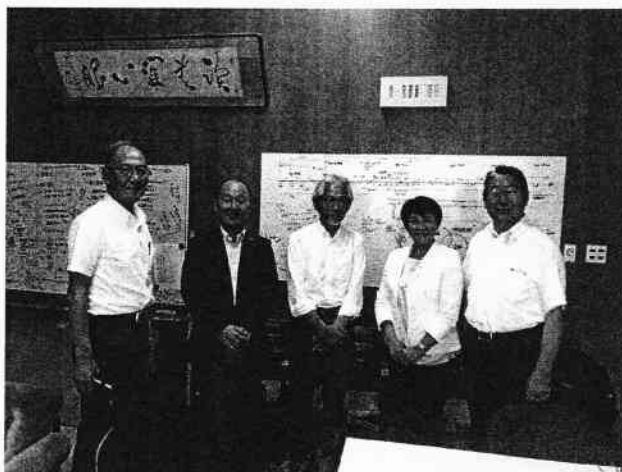
A 開かれた学びの場（知と創造の場）として、あえて区切られたスペースは設けず、グループワークスペース、3Dプリンタなどの作業用テーブル、個人用カウンターテーブルなど設置する

Q 職員はどのように配置するのか

A これから体制も含め、ワークショップで検討していく

Q 信州・学び創造ラボを^り3階になったのは

A 会議室や学習室などで使用している空間をリノベーションすることになった



視察報告書

報告者：福田 一夫

期 日：平成 30 年 7 月 26～27 日

視察地：長野県小布施町・長野市

「まちじゅう図書館」の取り組みについて

日 時：7月26日

視察地：長野県小布施町

大正12年に議会の議決より、わずか3か月で公共図書館を開設したという土地柄である。平成18年、新図書館オープンを目指してスタートするがプロポーザルにより設計者を決定してからデザインを決め、平成21年オープンとなる。毎月テーマを決め100冊程度を展示した正月には本2冊を袋に入れた本の福袋事業など特徴ある事業を展開している。

「まちじゅう図書館」事業は酒屋・味噌屋・銀行・郵便局などを一角に本を並べ、訪れる人との交流を図っている。

〈所感〉

新図書館を建設するにあたっては、町民との話し合いを重視し、意見を充分に取り入れている。そのため遠くの山を意識した屋根の形状や、さくらの木を守るためにカーブを取り入れた設計にするなど特徴あるデザインを興味深く感じた。

スタッフによるお薦めコーナーや、亡くなった方の関係の本を集めた追悼コーナー、年二回の図書館まつりなど創意工夫をもって図書館をアピールしていることが充分に感じられた。

「まちじゅう図書館」事業は、現在17館で展開中であるが、地域の結びつきが強いという町の地域性が背景にあると思われる。蔵書と共にくつろぎサロンとして自宅の一部を提供するなどコミュニティがしっかりしているため可能なことであると感じた。また、行政は補助金を出さないかわりに口も出さないという点に魅力を感じる。

県立長野図書館革命事業の取り組みについて

日 時：7月27日

視察地：長野市

教養と研究の図書館から市民の図書館へそしてIT革命をはさんで地域の情報発信拠点へ移行し、平成31年から長野図書館が目指すものとして共知、共創の場 ―多様な“CO”が生まれる空間― としている。共に知り、共に創るという創造的に学び、未来を創る学びの核となり、知の「創発」を起こす図書館を目指している。

平賀館長の着任意来、数々の改革が行われ、ITの導入を含めて大きく変わっている。

〈所感〉

平賀館長は大変に魅力のある方であり、その話は教訓に満ちている。図書館をもっと深くするにはどうすればいいか。図書館とはなにか。本とは何か。といった基本的な問題から出発し、常に思考している姿は尊敬に値する。

明治以来、各家庭にある日記や写真古地図や絵画などを利用すると、多くの人の興味が広がり人と人のつながりができるという話は大きな共感を憶えた。まさに共知、共創の理想を見ることができた。まさに図書館発のコミュニティ作りが現実となっている。

またIT技術を積極的に取り入れ十分に活用している。また他組織とも連携を強化している改革に人と人とのつながりを大切にする館長の人間性を感じることができる。

公明党土浦市議団行政視察報告書

吉田 千鶴子

1. 期 日 平成30年7月26日(木)～27日(金)
2. 視察地 長野県小布施町:「まちじゅう図書館」の取り組みについて
長野県:県立長野図書館改革事業の取り組みについて

<所 感>

1. 長野県小布施町:「まちじゅう図書館」の取り組みについて

- ・小布施町立図書館「まちとしょテラソ」でお話を伺う。
「まちとしょテラソ」は公募で決められた名前、「テラソ」は、「照らそう」であり、テラは、地球、大地、ソは、種を蒔くの造語でもある。「新図書館から、みんなを、地球を照らそう」との意味が込められているそうです。

小布施町の歩みについて

・小布施町は、人口11,000人の町であるが、昭和51年「北斎館」がオープン。町並修景事業や花のまちづくりなどとも相まって、現在100万人を超える来訪者で賑わっている。産業は、果樹栽培を主体とした農業で成り立つ。また、600年の歴史を持つ特産の栗を使った栗菓子や栗おこわが観光の目玉にもなっている町である。

まちづくりには、(町民、地場の企業、町外の志の高い方々、専門・大学・研究所)との連携、協働して取り組んでいます。

まちとしょテラソの活動

・「まちとしょテラソ」は、「学びの場」「子育ての場」「交流の場」「情報発信の場」の4本柱をコンセプトとする「交流と創造を楽しむ、文化の拠点」として開館。小布施町は、「交流」は、まちづくりの基盤となる概念となっている。

・2代目館長さんは、出版業界の方。「図書館は、そこに行けば何か刺激がありそうな、楽しいことが期待できそうな予感に満ちた場所でありたい。」と述べられています。

1. 本と人をつなぐ学びの場

・本の福袋「読本来福」は、正月の企画「本を読めば福が来る(かもしれない?)」として実施。本2冊を書名がわからないように包装し、内容が推測できるキーワードを貼付。包装を開くときのわくわく感を演出。大人用と子ども用80セットを用意。約1週間でなくなる。本市でも取り組んではと考えます。

2. 本を介して人と人をつなぐ交流の場

・「まちじゅう図書館」

酒屋・味噌屋・銀行・郵便局・カフェなどの一角に、仕事に関する本やオーナーの趣味の本を並べ、訪れる人と本を通しての交流を図る。

テラソ開館2年後、今から5年前、とりあえずオーナー所蔵の本を並べることから始めることとし10館でスタート。現在17館で展開中。数館で準備中。

開館は、市から開館を示すまちじゅう図書館の“フラッグ”をオーナーに渡すのみで、補助金なし、資金援助もありません。また、好きな時に始めて、好きな時に止めて良いという、とても緩やかなものとなっています。

「まちじゅう図書館」随一の蔵書を誇る「かねいちくつろぎサロン」は、地域活動の場として、観光客のお休みどころとしてなど、広く活用されています。普段は、近くの小・中学生が放課後にやってきて、宿題をしたり、おしゃべりしていることも多いそうです。図書館の本は、借りて帰ることも可能。返却については、借用者の自主性に任せておられます。

午後5時以降は、お酒もOK。若い人から高齢者まで交流の場となり、居場所づくりになっている。ゴミ等は、自己完結。

本を介し、オーナーと来訪者が楽しめる場となっています。

本市は、新図書館は、中心市街地の活性化も掲げています。そうした観点からも、自転車のまちとの文武両道の観点からも、高校生のまちの観点からも、高齢者の居場所としても、本を介した人と楽しめる場所として、是非取り組んでいただきたいと考えます。

2.長野県：県立長野図書館改革事業の取り組みについて

「図書館改革について」県立長野図書館長の平賀研也様からお話を伺う。

・平賀プランH27～H31の5年間は、移転50周年となるH41までの約15年間を見据えた図書館像である「Library2.5 地域の情報拠点」「Library3.0 共知・共創の場」の実現に向けた基礎作りの期間と位置付けている。

共知・共創とは、

◇自立した市民が、地域社会の課題解決に貢献しながら創造的に学ぶ場

◇未来を創る 学びの核 となり知の「創発」を起こす図書館

これからの図書館像の実現を目指して「情報」の改革、「人」の変革、「場」の革新、の事業を展開する。

「図書館改革」は、まず、「図書館とは、何?」「本を読むとは何?」この議論

を深めることから始めること。今まであるものを変えることは、エネルギーがいる。

次の段階は、図書館で“ワクワクする”“楽しんでいるか？”

「共に知り合う、誰かと関わり合う。」機会を、チャンスを与えられるか？

このことが大事である。

そして、資料の収集・収蔵資料を提供する「本の館」から「情報の拠点」へ共知・共創の場を目指す。

また、さらに次のように述べられています。

『急速に大きくする社会の中、これからの時代を生きていく人々に必要なのは、「創造力」である。そしてこの基礎となるのは、知識・技術のみならず、思考力・判断力・表現力を総合的に用いて多様な価値観との関わり合いの中から新たな解を生み出していく「情報編集力」である。』

『T 革命（2000 年）以降、図書館には、「地域の情報拠点」としての役割が求められてきたことに加え、これからの方向性として、情報や人材などの資源を社会全体で共有し、新しい知恵をみんなで作っていき、開かれた学びの場「知と創造の場」としての役割が期待されている。』

共知・共創は、「学びと自治」、知って分かち合うこと。

本市の新図書館も大いに参考となる考え方であると思います。

以上

【平石所感】

①「まちじゅう図書館」の取り組みについて

小布施町では、2000年から始まった「オープンガーデン」は、個人宅の庭を観光客などに公開する取り組みを行ってきた。「まちじゅう図書館」の取り組みもその延長線上にあり、まちの人と観光客との交流ということを観光事業へ育てあげている事例は、素晴らしい先進事例である。小布施町は、経済・文化の中心として発展してきた歴史的があり、まちの人のなかにホスピタリティが受け継がれてきたことなども要因のひとつであると言えるのではないだろうか。

また、小布施の町並みをはじめ、今回視察した「まちとしょテラソ」やシンボルマーク「オブセドリ」のフラッグなどを見ても、デザインをととても大切にしている印象を受けた。こういったこともまちづくりにおいてとても重要なことである。

本市において、例えば、空き家や空き店舗などの活用方法として、捨てるにはもったいないといった理由で市民の方の家に眠っている本などを持ちより、市民主体で運営する「持ち寄り図書館」といった取り組みなどを検討してはどうかと考える。

②県立長野図書館改革事業の取り組みについて

平賀館長ご本人から、図書館改革事業について様々なお話を伺う貴重な機会をいただいたことに感謝を申し上げたい。

図書館の役割として、戦後、Libray1.0「教養と研究の図書館」、1970年代からはLibray2.0「市民の図書館」、IT革命を契機として、Libray2.5「地域の情報拠点」に変化して、さらに生涯学習の場としてLibray3.0「共知・共創の場」として、①自立した市民が、地域社会の課題解決に貢献しながら、創造的に学ぶ場、②未来を創る、学びの核となり、知の「創発」を起こす図書館として、今後図書館が目指す姿の明確なビジョンを掲げて、具体的な取り組みを進めていることに非常に感銘を受けた。写真アーカイブ「高遠ぶらり」アプリ事業やWikipedia LTB @信州など、ITを活用した取り組みは非常に素晴らしい図書館発のコミュニティ事業であり、参考になった。本市においてもこのようなITを活用した取り組みを、ぜひとも本市の図書館事業の中でも取り入れていきたい。そして、素晴らしい図書館空間を市民の方と一緒に創りあげていきたいと考える。